

小中学は中国、高校は山口、大学は東京

第10期 高松正司 (1962年卒業)

アメリカ科への進学当時を回顧するに先立ち、それまでに受けた私の教育について振り返り、稿を改めて「中国における統治の正当性」について私見を述べたい。

レッドチルドレンー中国革命の後継者たちー

2016年12月7日、NHKBS1で「レッドチルドレンー中国革命の後継者たちー」という番組が放映された。内容は中華人民共和国成立後に、中国に渡り持てる専門技術で新中国に貢献した外国人（一部華僑も含まれるが主として欧米人）の子弟たちの物語である。テレビに出演している成人したかつて子供たちは、みな中国人顔負けの標準中国語（北京地方の中国語で中国では普通語と呼ばれる）を流暢に話しており、当時の中国の小中学校で中国人の子供たちと一緒に教育を受けたことが窺える。成人して受けた教育の影響か、そのまま中国に住み着いた人もおり、その後の文化大革命の激動の中で数奇な運命に弄ばれた人もいる。この人達の父母は新中国が成立した後、中国に招かれたり、あるいは自ら中国に来て働いたようであるが、それより以前1945年の日本の敗戦後まもなく中国共産党の要請に従い中国に留まって、中国共産党のために働いた日本人の一団がいた。

それらの日本人は、中共軍最初の空軍航空学校の創設に協力し、朝鮮戦争でアメリカの撃墜王といわれたパイロットを撃墜した飛行士などを育てた旧関東軍航空隊の人達、中共軍に従軍した多くの医師、看護師たち、鉄道の復旧や新線の建設に協力した旧満鉄の技術者たち、映画の製作を指導した満映の人達等々多岐にわたっている。これらの日本人の多くは1953年に与えられた使命を果たし日本に帰国した（引き揚げといわれている）。

父は満鉄の技術者

満鉄の技術者で当時科長（日本の課長に相当）であった私の父も、部下が残留を命じられたため自ら残る道を選び、戦後8年間中国の鉄道で働いた。

私は1938年に奉天に生まれ、45年4月在満国民学校に入学してまもなく学校はなくなり、それ以後日本に帰国するまで、義務教育の年齢のほとんどを中国で

日本人小学校や中国人の中学校に通い教育を受けた。中学の2学期の始まる直前の8月に日本に帰国し、田舎の中学3年に編入し、翌年高校入試を受けて山口県徳山高校に入学、日本での教育が始まった。日本人小学校というのは1947年ころ、中国当局によって、残留日本人の子弟のためにつくられたもので、小中併設校だった。

高校時代は3年間体育会ハンドボール部に属し、県下で1、2を争う強豪校の正選手として活躍した。中国人の中学校に通った期間は短く当時は学校での政治教育はまだ体系だって始められてはいなかったのも、冒頭に述べたレッドチルドレンといわれるほど、「赤く（レッド）」染まっていたわけではないが、成立したばかりの新中国で育ちその影響下で教育を受けたことは矢張り争えず、今でも私なりの中国観、特に毛沢東観を引きずっている。

アメリカ科は第二志望

1年浪人して東京大学に入学したときには教養学部には地域研究のコースがあることは知っていた。中国研究のコースがあれば多分そこに入っていたと思うが、なかったのも、衛藤瀋吉先生の中国政治に関する講義に興味を持ち、国際関係論に進もうと思ったが点数が足りなかったようで、確か第二希望のアメリカ科に進んだと思う。当時アメリカ科には学生は雑巾のごとく絞れば絞るほど良いという考えの持ち主の中屋健一という怖い先生がいるということで緊張したのを覚えているが、幸か不幸か我々の学年からは井出義光先生がアメリカ史を担当した。

毎週分厚い原書を渡されレポートを書かされる授業は中屋先生の授業と同じで不慣れな原書を何とか指定のページだけ読み期限内にレポートを間に合わせるだけが精いっぱい。単位を落とさなかったのが不思議なくらいで、今でも井出先生には感謝している。そのあとパドバー先生というアメリカ人の先生の授業ではレポートももちろん英語で、今考えてみても当時の英語力でどうして単位を落とさなかったのか不思議なくらいである。

人間80歳も近くなると昔の記憶は、嫌いなこと不愉快なことは大方失われるようで、例えば私の通った小中学校では音楽の授業がなかったはずはないのだが音楽の授業の記憶は何も思い出さない。アメリカ科の授業がすべて嫌いであったわけではないと思うが、授業の記憶はあまりない。

中屋先生の主宰する中屋スキー教室というのがあって、それに参加するために初めてスキーをしたのもその頃である。今は亡き福林昌身君の伝手で東電の池の平山荘に泊まり、オーストリアスキー教室から戻ったばかりの久保田誠一君のコーチで熱心に練習をした。



(焼岳の山頂にて)

中屋スキー教室は志賀高原高天ヶ原の文春の小屋に合宿、自炊で朝から晩まで滑った。中屋先生が竜王越えをやろうというので、勇んで焼額山までラッセルして登った。ところが先生から初心者はここから帰れといわれた。この時の無念さは長く記憶に残り、その後何回も竜王越えをするきっかけとなった。

このスキー教室には、女子大生などもおり、仲間にはそれが縁で後に結ばれるものもいたが、私はそのような幸運には恵まれずただひたすらスキーに熱中していた。中屋先生とは在学中の授業ではあまり縁がなかったが、スキーと卒業後のゴルフなどで親しくお付き合いを仲間とともにさせていただいた。



先生と10期生
(小沢/福林/中屋先生/著者/久保田)

正義は弱きものの側にある

私のアメリカ科進学のも動機は、アメリカを研究しようとかそういう情熱には欠けていたが、社会に出て仕事の関係でアメリカにもいき、アメリカ人とも付き合い、アメリカ人の友人もできた。そういう中でアメリカに対する理解も深まり、トランプが大統領になるということにもそう驚きを感じない程度には理解しているつもりである。

私が幼少、少年時代を過ごした中国も当時からは予想もできない躍進を遂げて今や米中二大国となり、大きな影響力を發揮している。

中国については、そこで育ち初等教育を受けた地であり私はそれなりに理解しているが、アメリカに対する理解のきっかけはアメリカ科に在籍したおかげであるかと思っている。アメリカや中国のような大きな(国土が広いという意味で)国の人

には共通のおおらかさのようなものがあると私はいつも感じている。それが鼻につくと嫌う人もいると思うが、私は好きである。

アメリカ史の授業でインディアンの歴史を学んだが、いまだに『正義は常に弱きものの側にある』ということを中心に刻んでいる。

中国における統治の正当性

習近平国家主席の狙い

2015年9月3日、習近平をトップとする中国共産党は、「中国人民抗日戦争勝利と世界反ファシズム戦争勝利70周年記念式典」と銘打った盛大な軍事パレードをおこなった。

中国は戦後70年経って何故このような動きを見せたのであろうか？中国共産党が抗日戦争を指導し、勝利に導き中華人民共和国を建国した、また世界の反ファシズム戦争での勝利に貢献し戦後の秩序を構築した国であることを高らかに自国民に宣言することにより中国共産党の一党独裁の正当性を自国民に示そうとしたのだかろうか？

抗日戦争中、中国共産党が何をしてきたか、日本軍と戦った主力は中華民国の正規軍であるということは、歴史的にも明らかになってきているにもかかわらずこのようないわば大ウソをついてまで大規模なパレードをおこなったのはなぜか？

中国共産党統治の正当性を担うもう一つの柱、経済を発展させ国民を豊かにしていくことで、確かに豊かにはなったが、一党独裁下の経済発展は格差の拡大、腐敗などの大きな問題を引き起こし経済発展にも陰りが見え始めてきた。そのために、日本に勝ったということを殊更大々的にいわざるを得なくなってきた、そこで対日戦争に関する国家的記念日もいくつか制定したのである。

毛沢東時代はどうだったのか？

私たちが中国で暮らしていた（1945年～1953年）頃には抗日戦争勝利記念日などはなく、私の通っていた中学校でもそのような記念日を祝った記憶もなく、南京事件についてすら授業中に習った記憶もない。毛沢東にとっては、国民党を倒して中華人民共和国を建国したということに対して統治の正当性は何の問題もなく、抗日戦争の勝利など殊更言い立てる必要はなかったのである。

抗日戦争を戦った主力は国府軍であり、共産党軍ではない。もちろん共産党軍が日本軍と全く戦わなかったわけではない。よく知られている板垣師団を平型関で迎撃した林彪の戦い、彭徳懐が指揮した百団大戦などもあったが、毛沢東の戦

略は日本軍との大規模な戦いは避け、自軍の消耗を防ぎ日本軍の後方での勢力の拡大に専念していくのである。

満州事変の頃の国共両軍の争い

日本の本格的な中国侵略は柳条湖事件（1931年9月18日）を契機に日本軍が満州侵略を開始した「満州事変」から始まるといっていいだろう。

この時期に蒋介石は紅軍（共産党が組織した革命軍）の絶滅に奔走している。1928年の井崗山に対する第1回の包囲討伐に始まり、5回にわたって包囲討伐作戦を敢行したが、第5回の作戦ではこれまでの遊撃戦から100万の陸兵を投入した正規戦を展開し、紅軍に壊滅的打撃を与えた。この結果、紅軍は江西省の根拠地を維持できなくなり、1934年10月には北へ移動を開始した。これに先立ち北上抗日宣言を發し逃亡を北上抗日と言い換えた。

紅軍の「逃走」を可能にしたのは、日本軍の東北地区（満洲）への侵略が本格化し、国民軍がその対応に追われていたからである。北上の途次、貴州省遵義における会議でそれまでのコミンテルンの指導を廃し毛沢東の指導権を確立、数々の苦難の末1935年10月、陝西省保安にたどり着き、残りの部隊も翌年に集結し終結した。1万2000キロに及ぶ大移動は長征と名付けられた。

出發時10万の兵力は1万以下に減少し軍事的には大敗北であるが、北上抗日という名分を掲げ陝西省北部に根拠地を構えたことは大きな歴史的意義を持つことになる。

国共合作を生んだ西安事件

西安事件（1936年12月12日）は、陝西省北部に逃れた紅軍に対する戦いを督戦するために西安を訪れた国民党総裁蒋介石を、日本軍に故地を追われ紅軍と戦闘中の東北軍の張学良と西北軍の楊虎城が監禁し一致抗日を要求した事件で、一種の兵諫（兵を勝手に動かし、上官に諫言すること）である。蒋介石は部下の張学良らに紅軍との内戦を停止して、抗日のため国共合作に同意するよう迫られる。この結果、第2次国共合作が成立し紅軍は国民革命軍第18集団軍第8路軍と新4軍として正式に国府軍に編入された。蒋介石は紅軍殲滅を目前にしながら「大魚」を逸したことになったわけである。

中国では西安事件の翌年（37年7月7日）に起こった盧溝橋事件を日中両国が全面戦争に入ったという視点から「抗日8年」という表現が使われていたが、最近では31年の柳条湖事件を起点として「日中戦争15年」と呼ばれるようになっていく。

毛沢東は日本軍と共謀したのか？遠藤誉女史の著書について

日本の中国侵略が客観的に中共側を利した事実、更には毛沢東自身が訪中した旧日本軍の遠藤三郎中将や多くの日本人訪中者に対し、日本軍に感謝していると発言している事実などを基に遠藤誉女史は「毛沢東 日本軍と共謀した男」（新潮新書）を上梓している。同書は、これらの事例をあげながら、毛沢東は日本軍と共謀し、中国人民を裏切ったと結論づけている。

私は学者の遠藤氏のように各種の資料を渉猟することはできないが、毛沢東が日本軍と共謀して中国人民を裏切っていたとはとても信じることはできない。もし同女史の書いていることが、後世歴史的事実として認められるようなことがあれば、毛沢東を三分の誤りありとしながらも、建国の父として長年天安門にその肖像を掲げ尊敬して来た中国は一体なんであったのかということになる。

実は毛沢東の「日本の侵略に感謝する」という趣旨の発言は日本だけでなく中国でもよく知られており、これに疑問を持った北京日報の一読者から質問が出され、中国共産党中央党校党史部の教授が解説し回答している。私はそれを以前新華社のネットで見つけて読んでいる。毛沢東の「日本の侵略に感謝する」という言葉は深い含意のある言葉であろうと考えている。むしろ訪中し、会見を求めてくる日本人の多くが日本の侵略についてお詫びばかりをいうので毛沢東は、日本の侵略にも他の一面があることを指摘し、将来の日本と中国の関係は対等、公平な関係であるべきことを示唆したものではないかと思える。

毛沢東は訪中した旧日本軍の遠藤三郎中将には「貴方々との戦いは中国人民を教育し一握りの砂のような中国人民を団結させた、だから我々はあなた方に感謝しなければならない」と語っており、日本帝国主義の侵略は客観的に中国人民を覚醒させる反面教師の役割を果たしたとしている。このような反面教師としての役割については、毛沢東は多く語っており、蒋介石やアメリカのダレス国務長官なども反面教師としてあげている。

「注」反面教師とは広辞苑によると、見習い学ぶべきではないものとして、悪い見本、手本となる事柄、人物。第二次大戦後中国から来た語とある。

毛沢東の遠大な戦略

日本は圧倒的な武力で中国に侵攻したが毛沢東は最後の勝利は中国側にあると見て、その後に主敵となる蒋介石への対策を着々と進めていたのである。その長期的、遠大な戦略眼は素晴らしいものであり、日本敗戦後に主要な敵となる蒋介石軍の戦力が日本軍によって消耗させられるように仕向けることは将来を見据えた戦略だった。また日本の敗戦後直ちに工業の発展した満州を抑えるべく八路軍をソ連占領下の東北地区に発進させ、ソ連が国府と条約を結んでいることを考慮して、八路軍を東北民主連軍と名乗らせてソ連占領軍と悶着を起こすことなく、北満から占領していった。その戦略眼は卓抜したものであったことはその後の内戦の経過が示している。

蒋介石にとって日本軍よりも共産党が主な敵であったように、毛沢東にとっても

中国全土を支配する（解放するといっているが）ためには蒋介石が主要な敵であった。日本は敗れることが確実な一時的な敵であり、この副次的な敵の力を利用して主要な敵である蒋介石軍の力を消耗させようとするのは、主敵を倒すための戦略であった。したがって遠藤氏のいう日本軍と共謀したというのは当たらないと考えている。

繰り返すがこのようにして長年の戦いで敵蒋介石を倒して自らの政権を樹立した毛沢東には、統治の正当性などという問題は生じようもなく、習近平のように大きな嘘をつく必要もなく、日本に勝ったとか歴史問題とかいう必要もなかったのである。

「歴史を直視する」という意味

毛沢東にとっては戦ったのは主として革命戦争であり、革命戦争に勝利したということで、政権の正当性は十分である。抗日戦争を取り上げることは、倒した国民党の功績をいうことにもなり、取り上げなかったという意味もあるだろう。政権交代の正当性について日本に勝ったという必要性は全くなかったのである。

一方長らく一党独裁を続けてきた中国共産党も1989年の天安門事件以来共産主義というイデオロギーの説得力が喪失し、建国以来の危機を迎え、共産主義に替え愛国主義を高揚し国民の求心力を確保しようとし始めた。その転換期は1989年の江沢民時代から始まり習近平時代に入ってピークを迎えた感がある

習近平が抗日戦争に関する記念日を制定したことで中国人の対日感情がどのようになるかについて予断を避けるが、私は一貫して中国崩壊論にも脅威論にも与していない。

しかし本来自由な体制の下で発展すべき経済が、一党独裁体制下で、どこまで発展していけるのか、一党独裁と経済発展がどこまで両立していくのかを常に關心を持ってみている。驚異的な高度成長で、世界第二位の、経済大国になり世界経済に与える影響も極めて大きくなってきたのは、今我々が見ている通りであるが、ここにきて不透明な状況が生まれてきている。

経済的に不透明な状況にあり、トランプ新大統領の下で自国の利益を第一に掲げるアメリカとの関係がどうなるかも不透明であり、統治の正当性など多くの国内問題を抱える中国は対外的に戦を構える状況にはまったくないことを日本も理解し、紛争は外交的に解決し、長期的にこの巨大な隣国との関係の改善を図っていくべきであろう。中国のよくいう「歴史を直視する」という言葉は、日中双方にとっていわれるべきことであり、一方的に他国の歴史認識を非難するためにいわれるべきことではないと考えている。